2月に向けて

代表取締役　三田雅憲

寒さがますます厳しくなりますが、皆様十分気を付けてください。
1月元旦より能登半島地震が発生し、いまだ復旧に時間がかかるようです。私どもに出来ることは何もありませんが、せめて義援金を集めそれを石川県に届けることぐらいしか出来ませんが、社員皆様からのあたたかい気持ちを無事に届けることが出来ました。ご協力頂いた社員皆様に心より感謝いたします。
さて、今月は1月初旬の朝礼でも社員全員にご紹介しました、今年の箱根駅伝を大会新記録で2年ぶり7度目の総合優勝を果たした青山学院大学。なぜ青学は勝ち続けることのできる強いチームに成長したのか？原監督著「フツーの会社員だった僕が、青山学院大学を箱根駅伝優勝に導いた47の言葉」から「心根の悪い人間がチームをダメにする」の章を抜粋して紹介します。

前に触れましたが、育成だけでなく選手のスカウトの段階から人間性を重視すべきだと思い知らされたのは、監督就任3年目のことでした。1年目、2年目と思うような成績を残せなかった私は契約最終年の3年目、人間性を度外視してタイムが良いだけの選手をスカウトすることに決めました。その時獲得するつもりだった選手の指導者からこう警告されたのです。
「原君、あんな選手をとってはいけない。部がダメになるぞ。」そこまで言われてかえって意地になってしまった私は、その選手の能力をしっかりと開花させ箱根駅伝に出てやろうと決めました。しかし、その決断は最悪の結果を生んでしまったのです。
その選手が寮に入るや否や、チーム内で抜群のタイムを出す反面、自己中心的な乱れた生活でチーム内をかき回したのです。しかし、実力が抜きでているだけに他の部員は遠巻きに彼を傍観するだけです。そんなチームが集団で結果を残せるわけがなく、前年よりも成績は落ち込み、陸上部は空中分解の危機に陥ったのです。そしてしばらくしてその部員は辞めてしまいました。
ただ、この3年目があったからこそ「表現力豊かで、勉強もしっかり取り組める心根の良い選手」という青学陸上競技部のスカウト基準を確立できたのも事実です。
高校生の頃は少々タイムが悪くても、自分でちゃんと考えてコツコツと練習に取り組み、自分の言葉を大切にする子の方が、大学4年間で圧倒的に伸びるということを知るきっかけになりました。
企業でも抜群の成績を残す一人の営業マンが、その実績を振りかざし「俺はトップの成績を残している。だから何も言われる筋合いはない」と組織にまったく融合しなかったらどうなるでしょうか？最終的に組織がぐちゃぐちゃになるのは目に見えています。そういう自分のことしか考えられない人のことを私は「心根の悪いヤツ」と表現します。それよりも他の人と協調しながら行動できる「心根の良いヤツ」をとる方が、短期的な伸びは小さくても長い目で見ると組織全体の力を伸ばすことに繋がるのです。

と述べられています。1月にある得意先に新年の寄合いで訪問させて頂いた折に、古くからうちを知る社員さんから「光栄さんの社員は良い社員が多い」と嬉しい言葉を頂きました。この言葉に甘んじることなく、社風を良くして社員同士が切磋琢磨して人間的にも仕事的にも信頼され、信用される集団に成長していけるように頑張ってもらいたく感じております。